



Newsletter

2004年

〒730-0053 広島市中区東千田町 1-1-89

tel: 082-542-6975 fax: 082-245-0585

email: heiwa@hiroshima-u.ac.jp

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa>

地下室のレーニン

広島大学平和科学研究センター 小柏葉子

この春、エストニアを訪れる機会があった。エストニアは、1991年にソ連から独立して、今年で13年目を迎えるバルト諸国の一つである。

この国の首都タリンの世界遺産にもなっている旧市街に程近いところに、占領博物館がある。その名のとおり、ここは、1940年から1991年にいたるまで、ソ連に占領されていた時代のエストニアをテーマにした歴史博物館である。コンクリート打ちっぱなしのモダンなフォルムの建物には、当時のニュースフィルムや新聞、ポスター、果てはソ連への併合時に国外へ逃れたエストニア人たちが下げていた四、五十個あまりのトランクといった展示物が並べられ、占領時代の状況を伝えているが、私にとって、何よりも強烈な印象を受けたものは、地下室にあった。

博物館の建物中央の階段を下りていくと、地下にトイレがある。階段を下りた私は、ほの暗い中に、巨大な彫像をみとめて、思わずぎょっとなった。よく見ると、天井まで届くレーニン像が、あたかも門番のごとく、トイレの入り口の右と左に一体ずつ置かれているではないか。おそらく、独立以前には、街の広場にあったであろうレーニン像のこの姿は、階上のどの展示物よりも如実に、ソ連占領時代に対するエストニア人の思いを物語っているように感じられた。

おりしも、タリンの宿泊していたホテルでは、NATO関係の会議が開かれており、アメリカやフランスなどのネームタグをつけた参加者たちが行きかっていた。また、現地のメディアは、目前に迫ったEU加盟に関するニュースをさかんに報じていた。地下室のレーニンに別れをつけ、「新しいヨーロッパ」の一員として踏み出すことになったエストニアの姿を目の当たりにして、一つの新たな地域が誕生していくさまをまざまざと実感させられた思いがした。

2003年度平和科学研究センター活動 シンポジウム

広島大学平和科学研究センターの第28回シンポジウムは2003年12月7日、広島国際会議場にて「紛争後の復興支援」と題して行われました。当日は内外の研究者、大学院生、一般市

民の方々などの参加者がパネリストを囲んで活発な議論を展開しました。

基調講演は、ナスリン・アジミ（国連訓練・調査研修所[UNITAR]アジア太平洋地域広島事務所）が、「紛争後復興における国連の役割：東チモールとアフガニスタンにおける教訓から学ぶこと」と題して行いました。その他のパ

ネリストは、以下の通りでした。

井上 礼子 (アジア太平洋資料センター)
上杉 勇司 (沖縄平和協力センター)
中尾 秀一 (アジア福祉教育財団難民事業
本部関西支部)

研究会

第 149 回 (2003 年 9 月 16 日)

飯島昇藏「レオ・シュトラウスと保守主義
－国内政治と外交政策－」

第 150 回 (2003 年 10 月 31 日)

佐藤謙「北方四島の植生構成」(環境科学共
同セミナーと共催)

第 151 回 (2003 年 11 月 6 日)

Martin Shaw, “War and Genocide”
(日本平和学会中国・四国地区研究会と共
催)

第 152 回 (2003 年 12 月 17 日)

Zhaxybay Zhumadilov, “Health Effects of
Radiation Associated with Nuclear Weapons
Testing at the Semipalatinsk Test Site”

第 153 回 (2004 年 2 月 3 日)

秋道智彌「漁業紛争とエコ・ポリティクス -
沖縄と東南アジアの事例から-」

第 154 回 (2004 年 2 月 27 日)

井上研二「古いロシアと新しいロシア
- わが国のメディアに見るソ連観とロシア
観-」

第 155 回 (2004 年 3 月 17 日)

竹峰誠一郎「被爆証言の収集と分析 - マー
シャル諸島を事例として」
(原爆放射線医学研究所国際放射線情報
センターと共催)

出版物

・『広島平和科学』(第 25 号、2003 年)

所収論文：

Vincent HOFFMANN-MARTINOT, “New Politics
and Changing Parties: A Comparative
Perspective”

川野徳幸・平林今日子・星正治・松尾雅嗣「セ
ミパラチンスク核実験場近郊被曝証言の日
本語版全文データベース化」

松尾雅嗣・山下明博「東北タイにおける言語能
力と自称」

倉地曉美「ボランティアと日本語教師のカルチ
ャー・ステレオタイプ－認識と自己抑制に

関する研究－」

森玲子「留学生教育における平和の視点－留学
生の論じる「日本との関係」と国際理解」

村上登司文「平和博物館と軍事博物館の比較－
比較社会的考察－」

材木和雄「南スラヴ人統一国家構想の起源と展
開－1917 年「コルフ宣言」に至る過程－」

篠田英朗「平和構築の法の支配アプローチ－戦
略的視点からの整理－」

・IPSHU 研究報告シリーズ研究報告 No.31：平
和科学研究センター(編)『人間の安全保障
論の再検討』(2004 年 2 月)

所収論文：

松尾雅嗣「平和と安全保障」

小柏葉子「太平洋島嶼諸国における紛争と人間
の安全保障－フィジーを事例として－」

篠田英朗「安全保障概念の多義化と『人間の安
全保障』」

勝間靖「開発における人権の主流化－国連開発
援助枠組の形成を中心として－」

Gunnar Garbo, “Can Military Intervention Be
Humanitarian?”

(出版物の詳細についてはセンターのホーム
ページをご覧ください)

センター専任研究員の研究教育活動

松尾 雅嗣 (教授)

学術論文：

- ・ with Noriyuki Kawano and 6 others (eds.),
*Report on the Actual Conditions of the
Radiation Exposed Residents near the Former
Semipalatinsk Nuclear Test Site*, Hiroshima:
Research Institute for Radiation Biology and
Medicine, Hiroshima University, and
Hiroshima Peace Science Consortium,
Hiroshima University.

- ・ 小柏葉子・松尾雅嗣(編)(2004)『アク
ター発の平和学：誰が平和をつくるのか』
法律文化社。

- ・ “Significance of Collecting Testimonies of
Those Exposed to Radiation in Semipalatinsk,
Kazakhstan: In Comparison with Those of
Hiroshima and Nagasaki,” Kawano et al (eds.),

2004, pp. 49-51.

- ・「平和と安全保障」、広島大学平和科学研究センター(編)『IPSHU 研究報告シリーズ研究報告 No.31:人間の安全保障論の再検討』(2004年2月)所収、1-23頁。
- ・「国家の平和を越えて—新しいアクターの平和」、小柏葉子・松尾雅嗣(編)(2004)『アクター発の平和学:誰が平和をつくるのか』、法律文化社、1-15頁。
- ・山下明博と共著「東北タイにおける言語と自称」、『広島平和科学』、25号、53-80頁。
- ・川野徳幸ほか2名と共著「セミパラチンスク核実験場近郊被曝証言の日本語版全文データベース化」『広島平和科学』、25号、2003年、31-51頁。
- ・with Rouvinski, Vladimir, “The Clash of Myths: A Review of *The Value of the Past: Myths, Identity and Politics in Transcaucasia* by Victor A. Shnirelman, *Journal of International Development and Cooperation*, vol. 9, no. 2, pp. 101-117.

教育:大学院国際協力研究科「平和学」、「世界秩序論演習」、「国際関係特論」(分担)。総合科学部「紛争解決論」、「戦争と平和に関する総合的考察」(分担)。医学部「医療国際協力論」(分担)。短期交換留学プログラム「人権と平和」(分担)。

学会での活動:日本平和学会監事。

研究費:平成15年度前期広島大学研究支援金「原爆文学を中心とした広島原爆資料の目録作成と電子化の研究(研究代表者)」

小柏 葉子 (助教授)

学術論文:

- ・『『南』の諸国—小島嶼発展途上諸国の求める平和—』小柏葉子・松尾雅嗣(編)『アクター発の平和学:誰が平和をつくるのか』(法律文化社、2004年)所収。
- ・「太平洋島嶼諸国における紛争と人間の安全保障—フィジーを事例として—」、広島大学平和科学研究センター(編)『IPSHU

研究報告シリーズ研究報告 No.31:人間の安全保障論の再検討』(2004年2月)所収、25-50頁。

- ・「地域・国家・エスニシティ—太平洋島嶼フォーラムの地域紛争への対応」、山本真鳥・須藤健一・古田集而(編)『オセアニアの国家統合と地域主義』(国立民族学博物館地域研究企画交流センター、2003年)、257-297頁。

「太平洋島嶼フォーラムの変化と連続性—オセアニアにおける多国間主義の現段階」、日本国際政治学会(編)『国際政治』第133号「多国間主義の検証」、2003年、275-297頁。

教育:大学院国際協力研究科「地域協力論」、「世界秩序論演習」、「国際関係特論」(分担)。総合科学部「地域協力政策論」。県立長崎シーボルト大学「現代世界と平和」(分担)。

学会での活動:日本平和学会理事、編集委員長、学会設立30周年記念「平和学シリーズ」刊行委員、2003年度秋季全国研究集会部会1「自由論題—グローバル社会の諸相」討論者。日本国際政治学会評議員。

社会での活動:国連大学グローバル・セミナー島根セッション・プログラム委員。国立民族学博物館共同研究「オセアニア諸社会におけるエスニシティ」研究員。

篠田 英朗 (助手)

学術図書:『平和構築と法の支配:国際平和活動の理論的・機能的分析』(創文社、2003年)、255頁。(朝日新聞社第3回大佛次郎論壇賞受賞)

学術論文:

- ・「平和構築と選挙支援」、財団法人日本国際問題研究所・平成14年度外務省委託研究報告書『紛争予防』、平成15年3月、6-16頁。
- ・「平和」、押村高・添谷育志(編)『アクセス政治哲学』(日本経済評論社、2003年)、217-233頁。
- ・「平和構築の法の支配アプローチ—戦略的視点からの検討—」、『広島平和科学』、25号、2003年、189-218頁。

- ・ 「安全保障概念の多義化と『人間の安全保障』」、広島大学平和科学研究センター(編)『IPSHU 研究報告シリーズ研究報告 No.31 : 人間の安全保障論の再検討』(2004年2月)所収、51-84頁。
- ・ 「人間の安全保障から見た平和構築活動の意義－アフリカの文脈での検討への導入として－」、望月克哉(編)『アフリカにおける「人間の安全保障」の射程－研究会中間成果報告－』(独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所、2004年3月)1-15頁。

学会報告(学術講演) :

- ・ 「劣化ウラン問題：人道からの挑戦」、放射線影響学会第46回大会、京都リサーチパーク(東地区)、2003年10月8日。
- ・ 「法の支配と力の支配：国際平和活動におけるアメリカの影」、青山学院大学国際政治経済研究開発センター研究会、2003年10月15日。
- ・ 「アメリカ『帝国』の思想的背景－リベラル・デモクラシーと『歴史の終焉』再検討」、日本国際政治学会2003年度研究大会、つくば国際会議場、2003年10月18日。
- ・ “Operational Phases of Human Security Measures in and after Armed Conflict: The Link between Humanitarian Aid and Peace-building,” 2004 Annual Convention, International Studies Association, Montréal, Canada, March 18, 2004.

その他 :

- ・ 「グローバル化と主権国家：アメリカのイラク戦争」、『現代思想』(2003年5月号)、166-176頁。
- ・ 「アメリカ『帝国』とリベラル・デモクラシー：『ホブズ的世界』と『歴史の終わり』」、『現代思想』(2003年12月号)、151-162頁。
- ・ 「平和構築に戦略的視点を」、朝日新聞2003年12月12日夕刊(東京版)9面。
- ・ 「イラクの〈平和構築〉のために：司法整備と連動させた『民主的警察』の育成を」、東京新聞2004年2月17日夕刊、8面。
- ・ 「平和構築とイラク情勢」、『論座』(2004年2月号)、174-179頁。
- ・ 「『平和構築と法の支配』－冬のサラエボ

で振り返る－」、『創文』(2004年1・2月号)、No.461、5-9頁。

- ・ 「人質事件で露呈した日本の国際平和協力の限界」、『論座』(2004年6月号)、36-47頁。
- ・ 書評「納家政嗣著『国際紛争と予防外交』(有斐閣、2003年)216頁」、『国際安全保障』第31巻、第4号、2004年3月。

研究費 :

- ・ 平成14-16年度科学研究費補助金若手研究(A)「平和活動による法の支配の確立－旧ユーゴスラビアでの諸活動を中心にして－」(研究代表者)。
- ・ 平成14-16年度科学研究費補助金基盤研究B(1)「国際法基礎理論の再構築」(研究分担者)。

2004年度研究プロジェクト

平成15年度前期「広島大学研究支援金」文・理ジョイントプロジェクトに、「資源管理をめぐる紛争の予防と解決に関する研究」(小柏葉子、松尾雅嗣、篠田英朗{以上、平和科学研究センター}、中越信和{総合科学部}、熊谷元{国際協力研究科})が採択されました。平和科学研究センター研究プロジェクト第1期「紛争解決と安全保障協力」の一環として、2005年10月までの2年間の研究期間に、限りある資源をいかに管理し活用していくかという点をめぐって発生している世界各地の紛争の予防と解決について、学際的な研究を進めていく予定です。詳しくは、センターのホームページをご覧ください。

ひろしま平和科学コンソーシアム

文部科学省が国立大学の地域貢献への取り組みを推進強化するために平成14年度から開始した「地域貢献特別支援事業」の一つに、広島大学の「ひろしま『平和メッセージ』発信事業」が選定されました。その実施母体として、平和科学研究センターを中心とする広島大学の職員や、広島県・広島市の職員などから、構成される「ひろしま平和科学コンソーシアム」

が、2002年11月に設立され、2003年度も継続して活動しました。詳細・活動予定などにつきましては、ウェブサイトをご覧ください。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa/cons/>

センター来訪者（団体、外国人研究者）

2003年月

2003年月日

2003年月日

出版物の予定

- ・『広島平和科学』（第26号、2004年）
- ・IPSHU Research Report Series No.19, *Conflict and Human Security*

人事

与那嶺麻香に代わり、2004年1月から元木理恵が新事務員として赴任しました。